

共同利用・共同研究課題「『失敗』のフィールド言語学」(jrp000285) 2023 年度第 1 回研究会 (通算第 1 回目)

日時：2023 年 10 月 15 日 (土) 10:00-16:00

場所：アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 303 大会議室+オンライン

本共同研究課題の初回となる今研究会では、3 件の発表を通じ、言語学のフィールドワークにおける過去の失敗事例についての情報共有をおこない、それにもとづき討論した。当日のプログラムは以下のものである。

1. 趣旨説明・メンバー紹介
2. 山越康裕 (AA 研所員) 「導入：諸々の失敗、そして後悔」
3. 塩原朝子 (AA 研所員) 「インドネシアの言語調査での様々な失敗」
4. 黒木邦彦 (AA 研共同研究員, 神戸松蔭女子学院大学) 「俺みたいになるな!!: データ管理を間違へちゃった先生」
5. 総合討論・次回以降の調整

研究会は AA 研大会議室での対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催した。はじめに、代表者の山越が趣旨説明をおこなったのち参加メンバーの紹介を行い、副代表の渡辺氏より「報告者の失敗を叱らない・馬鹿にしない」という提案を参加者全員が承諾し、個別事例の報告をおこなった。報告のなかにはプライベートな問題に立ち入った内容のものもあったため、本報告書においても差し支えの無い範囲で概要を述べる。

山越は、中国内モンゴル自治区をフィールドに実施してきたこれまでの言語調査を通じての様々な側面での失敗体験を報告した。現地機関とのネゴシエーションを怠ったことによる調査中断、録画機材の操作ミス (もしくは故障) による録画失敗、安易な判断による分析ミス、話者の「誤用」、つまり通常は容認されないような用例を見定められなかった失敗といった内容である。とくに「誤用」に関しては、研究者側が「きれいな」用例を求めることが前提になっていることにも原因があり、言語運用能力も話者によって差があることを受け入れることも重要であろうという意見が出た。

つづいて塩原は、インドネシアにおけるいくつかの言語を対象としたこれまでの調査を通じて、とくに調査協力者 (コンサルタント) との人間関係構築の事例や、調査地・調査言語 (フィールド) 選択の失敗といった報告をおこなった。コンサルタントとの関係は調査の場だけでなく、私生活に及ぶこともあるが、その際に研究者はどのような態度をとるのがよいのかという点は参加者各自が抱えている共通の悩みであることも確認された。さらにフィールド選択に関する問題は、より人の知らない地域へ、より不便なところへ行くことこそがフィールドワークだという先入観がよりよい調査環境から遠ざかる原因になっていた可

能性があるという指摘もあった。

黒木は、採録した音声データの管理方法、とくに適切な用例をより効率的に大量の音声データのなかから抽出するののかという問題に関して、試行錯誤を通してたどりついた現状の管理方法の紹介をおこなった。過去の失敗を通じて、録音したものを蓄積したままではなく、随時データ化する必要があるという解にたどりつく一方で、随時データ化していく場合にはアノテーションが調査のたびに変わってしまうおそれがあること、データ化の手法を複雑化しすぎた場合にはかえって他者が参照するハードルが高くなることなどが危惧される。そのためデータ化のタイミングについても難しい問題があることが報告を通じた意見交換のなかで確認された。データ化にアルバイトなどの協力をあおぐことも必要だが、その際の指示の出し方が難しいという意見もあった。

そのほか、総合討論では「民話」を語ってもらうことの難しさ／話者の思う「価値のあるおもしろい話」と調査者が思う「価値のある話」とのギャップ／非常に貴重な対話が収録されているがプライバシーに立ち入りすぎているために公開できない資料の扱い／ジェンダーバイアスによって語られない類の談話の存在など、参加者間でさまざまな事例紹介がなされた。

(文責：山越康裕)

※当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.